3.足袋産業(大正)の発展と足袋蔵の建設

大正時代の足袋産業は、企業統合による大企業化、大工場化には進まず、のれん分けして独立していく、小規模分業経営の道を歩きました。織布業、染色業、ネル張業、底張業、印刷業、箱屋、糸商、ミシン屋、増地業など足袋関連産業が派生してまち全体が「足袋づくり一色」に染まっていきました。大正初年から工場制工業の発展期となり、足袋生産は行程ごとに特化したミシンが導入されね足袋製造の分業化が一気に進み、生産量を増加させることになりました。コハゼ付きミシン、足踏み式裁断機などの機械化により、作業効率が飛躍的に拡大しました。生産量は大正元年に 1,000 万足を突破し、同 6 年には 3,272 万足になっている。その後、第一次世界大戦後の不景気で生産量は一時期低迷したが、12 年の関東大震災により京浜地方の足袋産業が壊滅したため、発注が行田に集中し、同 14 年には 4,312 万足に飛躍しました。その後行田足袋製造も進化を遂げ、大正末期から昭和初期には全盛期を迎えるに至っている。
反面、大正 15 年(1926)結成の労働組合の労働論争、昭和初期の恐慌と相まって足袋産業は混沌とした時代に向かっていきました。

----------大正時代の足袋----------

大正時代の足袋蔵エピソード①時代による変遷が理解できる。短冊型の店蔵、主屋、足袋蔵

保泉商店は足袋原料商として明治 35 年に創業し、明治 42 年に明治後半に建てられたと思われる土蔵(前蔵)を買い取ってこの場所に移転しました。その後足袋産業の発展と共に商売を拡大し、大正 5 年には大型の土蔵を建設しました。さらに第一世界大戦後の不況を乗り切って行田一の足袋原料商に飛躍。昭和元年には大谷石の店蔵(L 字形の店舗併用住宅)を建設しています。その後も昭和 7 年に一番奥の石蔵が、次いで東側にモルタル蔵(新蔵)が建設され、西側

の蔵の間が塗り壁で繋がれて、この蔵並びが完成しました。

大正時代の足袋蔵エピソード②第一次世界大戦中の行田の足袋産業。

大正３年(1914) ～大正７年(1918)第一次世界大戦で、大戦後の不況で一時的に足袋産業は停滞しました。当時の建物に行田最古の大規模足袋工場「イサミスクール工場」があります。明治 43 年に行田電燈株式会社が電気の供給を始めると足袋づくりに電動ミシンが導入され、足袋の生産量は飛躍的に拡大して行きます。この頃に前後して、ノコギリ屋根をもつ大規模足袋工場が建てられ始め、行田の足袋産業は近代産業へと発展して行きました。この工場は「鈴木勝次郎商店」が開設した既存する行田で最も古い大規模足袋工場(現在は被服工場)です。中央のノコギリ屋根の木造洋風工場は大正６年、入口右側の旧事務所は大正７年にそれぞれ建設されています。さらに、大正初期には「大澤商店」の足袋工場、「足袋蔵ギャラリー”門”」、「時田蔵」などの”足袋蔵”が建てられました。大正 10 年(1921)に行田駅開設しています。

大正時代の足袋蔵エピソード③大正 12 年(1923)関東大震災、東京の足袋産業衰退。

関東大震災による東京足袋が衰退すると、反対に行田の足袋産業は一挙に飛躍し日本一の生産量を誇る町になりました。それを機に行田の足袋は東京市場を制覇し、足袋の生産量日本一に飛躍しました。大正 11 年(1922)「橋本喜助商店」橋本商店は足袋の商標に「ライオン」を用いて活躍しました。

「牧野本店」の豪勢な店舗と足袋蔵工場 、レンガ造りの「大澤蔵」など足袋産業全盛期の栄華を象徴するような店舗や足袋蔵がこの時期に数多く建設されています。「旧忍町信用金庫」と「長井写真館」は大正期の木造洋館(モダンデザイン)です。足袋蔵は大型のもが建てられるようになり、大正時代末には鉄骨煉瓦造の足袋蔵が現われました。

大正時代 http://hifu-koworks.com/gyoda.tabinet.ver12/contents/010.pdf

江戸棟上げ http://hifu-koworks.com/gyoda.tabinet.ver12/contents/102.pdf